

# 大地

S 57. 5. 20

No. 10

真宗大谷派 浄国寺  
(23) 5724

## 母の思い出

\*\*\*\*\*

笹井喜作

今ではもう三十数年前の事である。私は九死に一生の大病をやみ、絶對安静を宣告された。その日も丁度往診の医者から、母と妻が「充分気をつけて見ている様に」といわれていよいよ夜に入った。七十才を越えた母は私の右手を、妻は左手を、両手の脈を押えながら、じっと私の脈搏を見ながら、見守っている。

意識のうすれていた私も、時々うなされた様な気持になりながら、その度毎に、うす目を開いたのだらうか。いつもかすかに見えるのは、妻の顔でなく、母の顔である。然も七十才以上の母の瞳でなく、

真剣な若い時の母の瞳そのままでの眼であり、それが翌朝明るくなるまで、続けられている。妻の顔の見えないのは、私の左手の脈搏を押えながら、うつぶせになり、夜中には時々ねむっておいたらしい様子であった。妻は末だ若いのでねむいのは当り前だと云えばそれまでだが、一晩中、それこそ一睡もせず、両手で脈を取り、眼をはなさず、真剣に呼吸の様子までうかがいつづけている姿こそ、母ならではと今でも母を思う度毎に、その時の様子がまざまざと浮き彫りになって映像される。あの時の老母の願いは、きっと自分自身の命とすりかえてもよいと云う神仏かけての祈りがこもっていたにちがいない。その母の祈りが今でも私の身辺にただよっている様な気がして、度々襟を正したくなる。今私も妻もその当時の母の齡になっっている。そして今のせがれに対する親の思いも変りがない。

以上

※註 笹井さんは、新井市柳井田の人。永い間教職に在られた。現在は退職され、悠々自適の生活。温厚な人柄で地域での信望も厚い。奥様は永年、護持会の世話人をつとめて下さっている。

## 日記から

四十九年十月

山崎武雄

午前九時より、甲状腺の呼吸の検査あり。検査前、通知もれのため、便所に行ったりぶらぶらしたりして看護婦に一寸心配をかける。幸い検査の結果は心配なき由安心す。その後、大仏主治医より明日いよいよ手術をする旨話され、患部について今一度説明あり。甲状腺の腺腫にて手術は一時間位の予定。但し出来場所悪き為、頸動脈声帯等に影響あると思う故要注意。大滝看護婦よりも、こまごまと手術の注意あり、午后、隆昌、睦も呼ばれている。注意、手術後の変化等について承認を求められる。竹内良恵さん、正ちゃん、正信、秋男、慎子、昌子、隆史、続々と見舞に来てくれる。床屋にてひげもそり明日の手術に心身の用意をなす。

午後九時、始めて眠り薬を飲んで就寝。身体何となく温もり、一寸動悸を打つ。

朝食の時に、一年生になつたばかりの息子が誰にもなしに尋ねる。

「ねエ、びんぼうっていうのは、どのぐらいしかおかねのないことなの？」

すぐには答えられずにいる大人達に、重ねて質問をあげせる。「うちは、びんぼうなの？」

この子は日頃から、よく言ば子どもらしくのびのびしてゐるし、悪く言えば要求(欲望)にキリのない子である。デパートなどの玩具売場に連れて行つても、上の二人の子供は予め大人の答を予測してしまつて、自分の要求に枠をはめてしまふ。大人にとつては都合だが、冷静に考えると何やらあわれになつてしまふ。そんな風に子供を追いつめたのは粉れもなく親である私共に違ひないのだらうけど。その点、下の息子は次々と、実にストリートに要求をぶつけてくる。巧みに大人の反応を読みとりながら、これが容れ

### 貧しさについて

山崎 慎 子

られればその次へと、要求を拡大してゆく。お金っていうのは、天から降って来るんじゃないんだよ、働らいて働らいて、やっと貰えるんだよ。だからそんな高い物を買うお金は家にないの、という母親の言い訳を、息子はいつも不満気に、又不思議そうに聞いてゐる。

そして、今朝の質問になつたらしい。

「あのね、いくらお金が沢山あつても、無駄遣いばかりしてたり、欲しい物を次々に買つてもまだ欲しい、まだ欲しいって、何でも欲しいがる心が貧乏なんだよ。」子供の聞きかたがたのことへの答になつていないな、なんて行儀の良い答え方だろうと思ひながら、私はとにかく、その場をとりつくろおうとする。

「じゃあ、おかあさんもびんぼうなんだね！」

「どうして？」  
「だって、テレビみながら、あのおふくほしいなとか、いってんじゃない」

登校時間が来て、あわただしい

朝の貧乏談義は幕となつたが、当の息子は、どのくらいがびんぼうなのかという疑問を、どの程度埋めることができたのだらうか。

私は私で自問自答、更には自責の谷間にすっぽり落ちこんでしまふ。今、切羽詰つて必要な訳でもないものを、次々に欲しい、欲しいと思ふ日の連続を思えば、息子に言つた答の言葉は、そのまま自分に返つて来てしまふ。私の心は実に貧しいのです。とは自分にも、又他人に対しても認めたくないことなのだが、よくよく考えれば、心豊かな毎日だと胸はつて言える自信などさらさら無い。必要な物が無い、お金がない、という物質的貧困は、言う迄もなく、とてもつらいことだ。同時に、あり余る物に困まれ、満たされていても、心が空白な精神的貧困を自分の中にはっきりと見てとれることは何とさみしいことだらう。



人間関係

山崎 隆 昌

南海の孤島に一人生活するロビンソンクルーソーの話は、文化的な人間生活、とくに嘘や見栄などで飾られた人と人との交りに対する痛烈な皮肉ですが、又同時に人は南海の孤島に一人では生きていけない悲しみが書かれています。人には、自分の力や考えでどうしようもない性があると思います。仏教でいう業というやつです。毎日の自分の行動の一つ一つを考えながらそのことを思っています。

「真の贅沢というのは、ただ一つしかない、それは人間関係の贅沢だ。」(サンデクジュベリ著「人間の土地」)の願いは、「星の王子さま」と併せ考える時、大切にしなければと思います。

昨年亡くなった父に想うことはこの人間関係において、相手の信頼に對し、いつも誠実に応えておいたことです。ともすれば、家族がいらいらすることすらありましたし、騙されたことも何度かあり

ました。しかし父が素晴らしい友人を多数持てたことは最高の仕上げであったと思うのです。

他の人を信頼出来ない人は、他の人からも信頼されません。

このことは結局人間そのものに対する楽天的な信頼と思えます。

「まず三悪道を離れて人間に生るること大きなよろこびなり。身は賤しくとも畜生に劣らんや。家は貧しくとも餓鬼に勝るべし、おもうことかなわずとも地獄の苦に比ぶべからず一略一」(源信僧都著「横川法語」)とあります。

※三悪道：衆生が自からの業によって到るべき地獄道、餓鬼道、畜生道

人は見栄や、エゴにがんじがらめにされた悲しい存在ですが、同時に素晴らしいものと思えます。

「能く一念喜愛の心を発せば、煩惱を断ぜずして涅槃を得」と「正信偈」にあります。それは、見栄やエゴ、煩惱につつまれた人間の存在と可能性を教えてくれておられます。そしてその底には、「一切の有情は皆もて世々生々の父母兄弟なり。何れも何れもこの順次生に仏に成りて助け候ふべきなり」(歎異抄)があります。

※有情：生きとし生けるものそれは命に對するやさしさ、あたかさであります。

僕自身嫌らしい、とり分け人との関係で堪らなく自分が賤しく思えることがしばしばですが、僕の行動は僕の中にきちんと残しておかなければと思うのです。忘れてはならないと思えます。

あとがき

◎一年中で一番、庭の美しい時期になりました。庭の花々に埋もれるようにして、前住職が亡くなったのは、一年前のちょうどこの頃でした。「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、あるじなしとて春な忘れそ」と詠んだのは、前住職の尊敬した管公でしたが、春先にはいち早く梅の花が咲き薫り、次いで他の花々も、あるじの居ない庭で、順ぐりに季節を運んでくれます。大地もようやく十号にこぎつたことを、本当に有難く思っております。

◎例年の通り、四面に護持会の予算報告を載せました。今年度も又、宜しくお願い致します。